

飯本信之先生の追憶

浅海重夫

飯本先生は女高師文科地歴部での27年間の教鞭を終えられたあと、新制お茶大の地理学科初代主任に就任された。在職9年（学生は10回生まで）は今にして思えば大変短い期間であった。その間学部長を経験され、また後にお茶大最初の名誉教授にもなられた。女高師時代の後期の頃、学界に進出する何人かの教え子を育てられたが、大学発足後は松井・能・吉川先生等のスタッフと教室における教育・研究体制の基礎づくりに努められ、お茶大地理学科の存在は不動のものになったと思われる。専攻科の設置は後の大学院の先駆となり、また学科目制から講座制へのステップでもあった。これらの地理学科基礎がためは先生の大きな功績であるが、先生を援助した籠瀬先生や貝山助手のサポートに恵まれたことも見落せない。日大への転職は、当時の同大学地理学科の基礎確立に向かったの強い懇望があったためと理解している。

私がお茶大に呼ばれて飯本先生に初めてお目にかかった時先生は既に58才で、手の届かぬ近づき難い方だった上、大柄で威厳に満ちた風貌なのに、ペイペイの私にこやかに話し掛けられ、萎縮させまいという気配りをされる方との印象をいたく受けた。二、三年後、先生の巡検指導の見習いで同行させていただいた時、宿の夜、先生が「わしは時々間違えられて困るんじゃ」といわれる。何かと思ったら小声で、会社の社長に見られるんじゃよと、その時の心中の苦衷を語られた。先生は研究室の書棚や大きなテーブルの配置がえをしばしば思いたち、それをまめに実行される。気分の為ばかりでなく公共の部屋を皆のためにより使いやすくするという配慮を常にお持ちであった。存在感のある大きな身体は同時に包容力と指導力にあふれ、学生たちの多くが敬愛しお慕いした先生であった。

先生の地理学研究について理解をあらたにすべき事情がいくつかある。私どもの知らない先生の履歴のなかに、学生時代における地理学科への転学科というひとコマがあった。先生をはじめ東大の鉱物学科に入学、3年終了後にあらためて地理を修められた。自然のベースの上に人文地理学を学ぶいわば地理学の理想を实践されたわけである。政治地理学の体系が先生の「政治地理学上・下」の著書によって確立されたことを、私どもは誇らしく思う。また、「干拓地の地理学的研究」は、還暦後にまとめられた学位論文である。しかしその構想は、40歳代に在外研究員としてヨーロッパ滞在中、オランダで開催された万国地理学会に日本代表で参加された時の、ゾイデルゼーのポルダー視察からのヒントを得られたものとうかがった。先生の外遊はさらに、万国地質学会（ソ連）出席やブラジル調査を含むユーラシア・アメリカ大陸間の航海でつづられた。パナマ運河を西から東に渡るのは厭なものだと、感想を語られることがあったが、外地での長期間の旅行中に日本から遠く方向への移動には、先生でも辛い思いをされたのかといささか感慨をうけた。

先生は多年にわたって文部省から数々の委員を委嘱され、多忙のご様子だった。中学高校教科書調査委員会、地理学振興委員会、図書推薦委員会、地名委員会、学術審議会地理学用語専門部会等々で、このうち用語部会では主査をつとめられ、お茶大在職期間のおもな業績のひとつ

つとなった。日本地理学会会長に就任されたのもこの頃である。数年間にわたった地理学用語の委員会には、雑用役に私も参加したので、当時の状況は記憶に新しい。多田・石田・幸田・岡山・下村ほかの先生方と用語の適切度について検討するうちに、甲論乙駁が果てしなく、余談から放談、雑談となり、その主導権をにぎっている我らの主査に正直なところ困り果てたこともしばしばであった。しかし先生からみれば後輩である学界第一線の多士斉斉を相手にして論談をかわすしばしの時を、先生は心から楽しまれていたのだと思う。

卒論ゼミで先生はよく、フィールドでは地域住民の悩みを聞いてその由来を探るのが地理学の目的なのだと言われた。卒業生を送り出すに当っては、「……ここでいうとくんじゃが、みな立派にしゃくわい人になってや、地理学くわのやね、名誉を傷つけんようにしてもらいたいんじゃ。」と最後の訓示をされるのが常だった。

飯本先生は今年、94才の天寿を全うされた。実に今世紀のほとんどを生きられたことになる。学界に、大学に、幾多の名誉を刻まれて。